

小金井雑学大学

第28号 令和3年1月

だより

コロナ禍で見つめ直す生涯学習への思い

小金井雑学大学 代表理事 五十嵐 京子

新年あけましておめでとうございます。

今年はどうのように新年を迎えられたでしょうか。昨年からの新型コロナウイルスの感染拡大で初詣も田舎への帰省も旅行もなかなかできず、皆さま行動を自粛しての静かなお正月だったと思います。

昨年は予想外のパンデミックで小金井雑学大学は3月から休講、一旦は秋からの再開を考えたものの、安心して来ていただくにはもう少し様子を見たほうが良いと判断し、年内いっぱい休講を決め、年明けの1月再開を決め準備をしておりました。ところが、ここに来て第三波の襲来と非常事態宣言の発出で再度の再開見送りを決めました。長い間の自粛生活は高齢者の体にとっても軽いうつ状態になったり、運動不足になる等余り良い事とは思えず、何とか再開をと思いましたが、叶いませんでした。最近の感染者増の動きはまったく先が読めないほどであり、忸怩たる思いです。

生涯学習という視点から休講の間考えていましたのは、今こそパソコンやスマホを使いこなして、生活の中に取り入れる学びをしっかりとすべきではないかということでした。実際に昨年秋の3か月間月2回のペースでスマホを使いこなそう、と講師をお呼びして理事中心の勉強会を企画いたしました。人と人との接触を避けながら、用事をこなすためにはオンライン会議をする、銀行振込をパソコンでする、支払いをスマホでする等を身に着ける必要があります。若い人たちは既にやっていることですが、高齢者には中々ハードルが高いテーマでもあります。そして、6回ほど理事を中心に講師をお呼びして少人数の勉強会を開催いたしました。学びたい、知りたいというテーマは人それぞれですが、大事なことは、知りたいという思いであり、それが生涯学習の原点だと思っております。

新年を迎えて、この原点を忘れないように、謙虚に学びに向かう姿勢を持ち続けることを改めて確認し、日常が戻る日を待ちたいと思います。

今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。



「我以外みな師」の生涯学習を

小金井雑学大学 学長 長坂 寛

令和からコロナへと年号が変わったのかと錯覚するような新春ですが、恒例によって”新年明けましておめでとう”とご挨拶申し上げます。

新年早々、クイズ調で恐縮ですが、第1問はコロナによって騒然としている現在、最も大事なことは何か。

その答えはたぶん、千差万別でしょう。なぜならば、現在当面している問題の多くが未知、未経験の事だからです。したがって現在最も大切なことは、この未知、未経験なことを解決する能力（知恵）だと思います。

ここに至って去来することは、アメリカの未来学者トフラーが『未来の衝撃』の中で述べている「学び方を知らない文盲」の一説であり胸が刺される思いになるのです。彼によれば、「文盲というのは、未来社会では読み書きのできない人の事ではなく、『学ぶ方法を学んだことのない人』である。つまり、学習方法を学習していない人は、新しい事態に直面した場合、いかにそれに対処し問題を解決したら良いのかわからないから結局は何もできない」のです。

第2問は、それでは『学び方を学んだことがあるか』。その答えはたぶん、「ある」と「ない」とで拮抗すると思われまふ。これは学校教育をどのように評価するかに左右されそうです。

第3問は、前問で「ない」と答えた我々多くの凡人はどのようにして学ばよいか。したがって、学びは学校教育だけではなく、学習対象は森羅万象（宇宙間の存在する数限りない一切の物事—広辞苑）であるので吉川英治のいう「我以外みな師」とか **Life Long intergrated education**（生涯教育）のうちの **intergrated** の真意を改めて吟味すべきところです。

前記のことから、わが小金井雑学大学の名称である雑学（雑多な物事・方面にわたる、系統だっていない学問・知識—広辞苑）は森羅万象と読み替えられる程適切な表示であるかが納得していただけたことと思います。



小金井雑学大学創立 23 周年記念講演のお知らせ

“すきとおった本当のたべもの” —宮沢賢治『注文の多い料理店』

中村龍一氏(松蔭大学教授)

■日時：3月21日 14時00分～16時00分

■会場：萌え木ホール AB室（商工会館3階） ■定員 45名

※コロナ情勢により予定を変更する場合があります。ホームページをご確認ください。

独習の日々

小金井雑学大学 理事 須知 正度

新型コロナウイルス感染症の自粛期間中に私が行っていたことを述べてみたいと思います。

私がこの二、三年に関心を持って実践していることは、万葉歌や古今和歌を声に出して詠むことです。目よりも耳で理解しようとしています。「歌」ですので、それなりのリズムを持っていると思います。和歌を声に出して詠むと、百人一首のカルタ取りのクセで詠み手のように五七五を上句、七七を下句として詠んでしまいがちです。このような場合を三句切れと称します。このように詠んでも、作者の伝えようとするものが伝わってくる（意味が解り易い）和歌もあると思います。しかし、五七の二句切れ、五七五七の四句切れ、あるいは極端に五の初句切れで詠む方が作者の本来伝えようとするものが良く解る場合が多いと思います。

春過ぎて夏来にけらし白妙の衣乾すてふ天の香具山 持統天皇
ご興味があれば、上の和歌を題材に試してみてください。



コロナ禍での思い

小金井雑学大学 理事 大塚和彦

自分はこれまで物事の判断は全てポジティブシンキングのスタンスで対応してきた。今回のコロナはどうか。これもピンチをチャンスに変えるという発想で臨むことにしている。

この際、自分自身を見つめ直し、改造する好機ととらえて方策を実践中である。

その一つは在宅肉体改造である。元々肩こり症ではあったが、積年の全身の凝りを、今般有り余る時間を使って少しずつほぐす作業を始めたところ、今まで隠れていた患部が次々と見つかり、ネット動画活用のヨガ体操やストレッチ、指圧等様々な方法で成果を上げつつある。当面、社会との関わりや人との接触が制限される中、いい意味での自分ファーストで先ず己を研磨して、来たるべきポストコロナ時には、より充実した生き方が出来るよう、今を自分なりに有意義に過ごそうという思いである。



休講中に理事として考えていた事、やっていた事

小金井雑学大学 理事 小嶋雅昭

新年 2021 年を迎えましたが、講義の再開ができず、お役たてない事、休講中ご迷惑をおかけしました事をお詫び致します。発生原因・対処方法が不明で死に至ってしまう程の新型コロナウイルスに脅かされ、自分の命を守るため、家族の命を守るため、どうしたら良いか？家族と話し合いながら、自宅に引きこもって、なるべくなら人に接触しない様に行動してました。外出すると感染して他人に迷惑がかかりますから、外食、会食、旅行は出来るだけ避けました。地域では時間の経過と共に対処方法が検討論議されてましたが、解決策が見出だせず、感染者は増化するばかりです。一番注目していたのは、新聞やテレビの報道とインターネット、SNS でした。報道で現状把握し、政府、行政、マスコミがどのようにして命を守るか注目してました。役に立ったのは、SNS、インターネット。スマートフォンやタブレットでした。



SNS は、報道されないマスク・体温計が何処で買えたか教えてくれました。ビデオ会話はコロナ騒動で会うことができない家族・知人・友人の安否確認ができ、安心させてくれました。また励ましてもくれました。活用させていただきました。

編集後記

雑学だより第 28 号はコロナ騒動の中、理事がどのような日々を過ごしてきたか寄稿いたしました。小金井雑学大学は一年近く休講しておりますが、状況が改善したらいつでも再開できるよう準備しております。皆様にお会いできる日を楽しみにしております。

事務局 田中 留美子

「小金井雑学大学だより」のバックナンバー(カラー)は
小金井雑学大学の WEB サイトでお読みいただけます。

小金井雑学大学 



発行責任者 五十嵐京子